

第二回 第一章「聖書について」

第一節（一）

「自然本性の光と創造と摂理の御わざとは、神のいつくしみと知恵と力を、じっさい人間が言い逃れできないほどに明らかにしている」

なぜ「聖書について」から始まるのでしょうか

前回も少し触れましたが、ウェストミンスター信仰告白は、「神論」からではなく、「聖書論」から始まります。これは偶然ではありません。改革派神学は、「私たちは神について自由に語り始めることはできない」と考えます。なぜなら、神は被造物ではなく、創造主だからです。人間は自然界を観察することはできます。しかし、神を顕微鏡で観察したり、実験室で分析したりすることはできません。神は、ご自身を現してくださらなければ、人間には知ることのできないお方です。だからこそ、神学は人間の探究から始まるのではなく、「神が語られた」という事実から始まります。このことを最もよく表しているのが、聖書という神の啓示なのです。しかし興味深いことに、第一節は、いきなり「聖書」から始まるではありません。まず、「自然本性の光」と「創造と摂理」について語ります。これは、神が人間に与えてくださった最初の証しについて考えようとしているのです。

「自然本性の光」とは何でしょうか

この表現は、現代の日本語ではあまり耳慣れない言葉です。英語原文では *the light of nature* と書かれています。ここでいう「自然」とは、山や海といった自然環境だけを意味しているわけではありません。むしろ、人間が神によって造られた存在として本来備えている理性や良心、善悪を判断する能力を指しています。カルヴァンは『キリスト教綱要』の中で、人間の心には「神についての感覚 (*sensus divinitatis*) 」が刻み込まれていると語っています。これは、「すべての人は生まれながらにして神を知る可能性を与えられている」という意味です。もちろん、それは救いに至る知識ではありません。しかし、「神など存在しない」と完全に言い切ることもできないほど、人間の存在そのものが創造主を指し示している、ということです。ウェストミンスター信仰告白は、このカルヴァンの思想を受け継いでいます。

「創造と摂理の御わざ」

次に信仰告白は、「創造」だけでなく、「摂理」を並べています。これは非常に重要です。創造とは、神が世界を無から造られたことです。しかし、もし神が世界を造っただけで放置されたなら、それは聖書の神ではありません。聖書は、神が今も世界を保ち、支え、導いて

おられることを教えます。これを「摂理」と呼びます。主イエスは、「空の鳥を見なさい」「野の花がどのように育つか考えてみなさい」と教えられました（マタイ 6 章）。また、一羽の雀さえも、天の父の許しなしには地に落ちることはないとも語られました（マタイ 10 章 29 節）。つまり、神は創造者であるだけではありません。今も世界を支配し、歴史を導き、私たち一人ひとりの人生を御手の中で支えておられる主なのです。カルヴァンは、宇宙を「神の栄光の劇場（*theatrum gloriae Dei*）」と呼びました。劇場に入れば、観客は舞台を見ます。同じように、この世界は神の栄光を映し出す舞台です。山々の雄大さ、星空の秩序、四季の移ろい、命の不思議、人間の理性、美しい音楽や数学の法則までも、神の知恵と力を映し出しています。詩編 19 篇 1 節は、そのことを簡潔に歌っています。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」。これは、まさにウェストミンスター信仰告白第一節の背景にある聖書の言葉です。

「神のいつくしみと知恵と力を明らかにしている」

ここで信仰告白は、「神の存在を証明する」とは言いません。そうではなく、「神のいつくしみと知恵と力を明らかにしている」と語ります。つまり、被造世界は神について何も語らない沈黙した世界ではありません。世界そのものが、創造主を証言しています。しかし、その証言は限定的です。自然は神が力ある創造者であることは教えてくれます。神が秩序を愛する方であることも教えてくれます。しかし、自然を見ても、イエス・キリストの十字架による贖いを知ることはできません。罪の赦しも、復活も、福音も、自然界から読み取ることはできないのです。だからこそ、この第一節は、このあと「しかし、それだけでは十分ではない」という方向へ議論を進めていきます。一般啓示は真実です。しかし、それだけでは人を救いへ導くことはできません。そのために神は、さらに特別な啓示として、ご自身の御言葉を与えてくださいました。そこに、聖書が与えられた理由があるのです。

第一節（二） 「人間が言い逃れ出来ない」

今回は、「自然本性の光」と「創造と摂理の御わざ」について学びました。神は、聖書がなくても、創造された世界を通してご自身の存在と力、知恵と善を示しておられることを確認しました。しかし、ウェストミンスター信仰告白は、その直後に厳粛な言葉を続けます。「じっさい人間が言い逃れできないほどに」。この一文は、第一章全体を理解する鍵となる言葉です。

ローマ書一章を背景として

この文章の背景にあるのは、使徒パウロのローマ人への手紙一章です。パウロはまず、人間は神について何も知らないとは言いません。むしろ反対に、「神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです」（ローマ 1 章 19 節）と語ります。さらに続けて、「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません」（ローマ 1 章 20 節）。ここで「弁解の余地がありません」という言葉が、そのままウェストミンスター信仰告白にも受け継がれています。つまり、信仰告白は独自の思想を語っているのではありません。パウロの聖書理解を、そのまま要約しているのです。

「知らない」のではなく、「知ろうとしない」

ここで注意したいことがあります。現代では、「神を信じない人は、神について知らないだけだ」と考えられることがあります。しかしパウロは、そのようには語りません。人間は神について全く無知なのではなく、神から与えられている証しを抑え込んでいる、と言うのです。ローマ書 1 章 18 節には、「人々は不義をもって真理を抑え込んでいます」とあります。「抑え込む」と訳されるギリシア語 (*katechō*) は、「押さえつける」「閉じ込める」という意味を持っています。たとえば、泉から水が湧き出てくるのを、重い石で無理に押さえつけるような様子です。神はご自身を証ししておられる。しかし人間は、その証しを受け入れようとせず、押し込めてしまう。それが罪なのです。ですから、問題は知識の不足ではありません。心の向きの問題です。

カルヴァンの「神認識の感覚」

John Calvin は、『キリスト教綱要』第 1 巻第 3 章で、有名な「*sensus divinitatis* (神認識の感覚)」という考え方を示しました。カルヴァンによれば、神はすべての人の心に、ご自身を知る感覚を植え付けておられます。それは教育によって後から身につくものではありません。人間が神に似せて造られた結果として、本来的に備えられているものです。だから世界中のあらゆる民族に、何らかの宗教が存在します。もちろん、それらがすべて真の神を正しく礼拝しているという意味ではありません。しかし、「神を求める」という現象そのものが、人間が神との関係のために造られた存在であることを示しています。カルヴァンは、このことを人間の内側に置かれた「神の指紋」のようなものとして理解しました。

一般啓示と自然神学は同じではない

ここで、一つ大切な区別をしておきたいと思います。改革派教会は「一般啓示」を認めます。しかし、「自然神学」を無条件に認めるわけではありません。この二つは似ているようで、実は異なります。一般啓示とは、神が世界と人間を通して、ご自身を現しておられるという聖書の教えです。一方、自然神学とは、人間の理性だけで神について十分な知識に到達できる、と考える神学的方法を指すことがあります。中世の Thomas Aquinas は、人間の理性によって神の存在を論証できると考えました。その議論には今日でも学ぶべき点があります。しかし宗教改革者たちは、人間の理性そのものが罪によって深く損なわれていることを強調しました。そのため、一般啓示は確かに存在するけれども、それだけで人間は神を正しく知ることはできない、と考えたのです。

バルトとブルンナーの論争

二十世紀になると、この問題をめぐって有名な論争が起こります。1934 年、Emil Brunner は、「人間にはなお神に応答する接点が残されている」と論じました。これに対して、Karl Barth は、ただ一言、**Nein!** (否！) という題名の小冊子を書いて反論しました。バルトは、人間の側には神へ至る道は一切存在せず、神はイエス・キリストにおいてのみ知られる、と強く主張したのです。この論争は神学史上きわめて有名ですが、改革派神学はどちらか一方だけを採るわけではありません。ウェストミンスター信仰告白は、「自然は神を証ししている」という点ではブルンナーに近く、「しかし自然だけでは救いに至る神知識は得られない」という点ではバルトの強調とも響き合います。つまり、聖書そのものが示している均衡を保っているのです。

一般啓示は「入口」であって「救い」ではない

私たちは美しい山々を見ると、「何と素晴らしい世界だろう」と思います。夜空を見上げれば、宇宙の壮大さに心を打たれます。新しい命の誕生に触れれば、人間の力を超えた神秘を感じます。その感動は大切です。それもまた、神が被造世界を通して語っておられる声です。しかし、その感動だけでは、「イエス・キリストは私の罪のために十字架で死なれた」という福音には到達できません。自然は創造者を指し示します。しかし、救い主を示すことはできません。そこに、聖書という特別啓示が必要となる理由があります。ウェストミンスター信仰告白は、この第一節で、まず一般啓示の豊かさを十分に認めます。しかし同時に、その限界も明確に語ります。だからこそ、次に「神は、ご自身をさらに完全に知らせるために、御言葉を与えることを良しとされた」と続くのです。この流れを理解すると、第一章は単な

る「聖書論」ではなく、「神がどのようにして人類にご自身を現してこられたか」という壮大な啓示の歴史を語っていることが分かります。

第一節（三） 神はなぜ聖書を与えられたのか

ここまで「自然本性の光」と「創造と摂理の御わざ」が神を証ししていること、しかし、それだけでは人を救いへ導くには十分ではないことを述べました。そこでウェストミンスター信仰告白は、大きく話題を転換します。

「それゆえ、主は、…自らの教会に御自身を啓示し、…その啓示の働きを、全く文書に委ねることをよしとされた。」

この「それゆえ」という接続詞は非常に重要です。つまり、一般啓示では十分ではない。それゆえ、神はさらに確かな方法でご自身を現された。それが聖書なのです。

神は「語る」ことを選ばれた

考えてみますと、神には他にも方法があったかもしれません。毎日、空に文字を書かれることもできたでしょう。世界中の人々が同じ夢を見るようになさることもできたでしょう。あるいは、一人一人の心に直接、同じ言葉を語り続けることもおできになったでしょう。しかし、神はそのような方法を恒常的な啓示の手段とはされませんでした。神は歴史の中で、人を通して語り、その語られた御言葉を書き記させる道を選ばれました。ここに、聖書という書物の独自性があります。聖書は、単なる宗教思想集ではありません。神が歴史の中で語られた御言葉の証言なのです。

神は歴史の中で語られた

聖書を読んでいますと、神は一度にすべてを語られたのではないことが分かります。アブラハムには約束を語られました。モーセには律法を与えられました。ダビデには王国の約束を与えられました。預言者たちは、その契約に立ち返るよう民を招きました。そして最後に、御子イエス・キリストにおいて、ご自身を完全に現されました。ヘブライ人への手紙 1 章 1～2 節は、この流れを美しくまとめています。

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

ここには、神の啓示が歴史の中で段階的に進んでいったことが示されています。改革派神学では、これをしばしば「漸進的啓示（progressive revelation）」と呼びます。神は少しずつ、ご自身の救いの計画を明らかにしてこられたのです。

「文書に委ねることをよしとされた」

ここで信仰告白は、非常に重要な表現を用います。それは、「**文書に委ねることをよしとされた**」という言葉です。この一文には、神の深い配慮が込められています。もし神の言葉が口伝えだけで伝えられていたなら、どうなったでしょうか。人から人へ伝わるうちに、内容は少しずつ変わってしまいます。ある人は付け加え、ある人は忘れ、ある人は誤解するでしょう。実際、人間の記憶は驚くほど曖昧です。昨日聞いた話でさえ、細部は思い出せなくなります。まして何百年もの間、正確に伝え続けることは不可能です。だから神は、ご自身の御言葉を「書き記す」ことを望まれました。ここには、神の恵みがあります。私たちの弱さをご存じだからこそ、変わることもない形で御言葉を残してくださったのです。

文書化は旧約聖書の中でも繰り返される

実は、「書き記す」という命令は、聖書の中に何度も現れます。モーセは律法を書き記しました。契約の言葉は石の板に刻まれました。預言者エレミヤは、神の言葉を書物に記すよう命じられました。イザヤにも、「これを書き記せ」という命令が与えられています。つまり、文書化は人間の発明ではありません。神ご自身が命じられたことなのです。

イエス・キリストも「書かれている」と語られた

主イエスご自身も、繰り返し「『.....と書いてある』」と言われました。荒野の誘惑では、悪魔に対して、「人はパンだけで生きるのではない」「あなたの神である主を試みてはならない」「あなたの神である主を礼拝しなさい」と、すべて旧約聖書を引用して答えられました。イエスが頼りとされたのは、神秘的な体験でも、その場のひらめきでもありませんでした。「書かれた御言葉」でした。復活後、エマオへの途上でも、モーセとすべての預言者から始めて、ご自分について書かれていることを弟子たちに説明されました。ここでも主は、「書かれた聖書」を神の権威ある言葉として扱っておられます。私たちが聖書を大切にするのは、改革派だからではありません。主イエスご自身が、聖書を神の言葉として受け止めておられたからです。

私たちへの問いかけ

現代は、映像の時代と言われます。短い動画や SNS が次々と流れ、情報は一瞬で消えていきます。しかし、神は教会を、そのような一時的な情報によって養おうとはなさいませんでした。神は、文字として残された御言葉によって、ご自身の民を育ててこられました。だから私たちも、聖書を「読む」ことを大切にします。読むとは、単に知識を増やすことではありません。語られる神の声に、静かに耳を傾けることです。ウェストミンスター信仰告白第一章は、この姿勢を私たちに教えています。神は今も語っておられます。しかし、その語りかけは、気まぐれな新しい啓示ではなく、ご自身が教会に与えてくださった聖書を通して、確かに響き続けているのです。

第一節（四） なぜ神は聖書を残されたのか

これまで私たちは、神が創造と摂理を通してご自身を現しておられること、しかし、それだけでは人を救いへ導く知識としては十分ではないことを学びました。そこで信仰告白は、神がご自身の御心をさらに明確に知らせるために、御言葉を文書として残されたことを語ります。そして最後に、その理由を次のようにまとめています。

「そのことによって聖書はこの上なく必要なものとなり、神がその民に自らの意志を啓示された上述以前の方法は、今では停止されている。」

この一文は、第一章だけでなく、改革派教会の聖書理解全体を支える重要な告白です。

「聖書は最も必要なものとなった」

ここで「必要」という言葉は、「便利だから」という意味ではありません。もし神が今も預言者を次々に遣わし、新しい啓示を与え続けておられるなら、聖書だけに頼る必要はないかもしれません。しかし神は、御子イエス・キリストにおいて救いの啓示を完成され、その使徒たちを通して福音を証言させ、その証言を聖書として教会に残されました。ですから、今日の教会は、新しい啓示を待ち続ける共同体ではありません。すでに与えられた神の御言葉に聞き従う共同体なのです。「聖書は最も必要なもの」とは、教会の信仰と生活を導く最終的な基準として、神が聖書を備えてくださったという意味です。

「以前の方法は、今では停止されている」

この表現を読むと、「神はもう何も語られないのですか」と疑問に思う方がおられるかもしれません。ここで信仰告白が言おうとしているのは、神が沈黙されたということではありません。

せん。神は今も御霊によって教会を導き、慰め、励まし、御言葉を悟らせてくださいます。しかし、その導きは、新しい教理を付け加えるためのものではありません。神が救いのために必要なことは、すでに聖書に完全に与えられています。ですから、教会はそれに何かを付け加えることも、そこから取り除くことも許されません。この点で改革派教会は、宗教改革以来、「**聖書のみ** (*Sola Scriptura*)」を大切にしてきました。それは、「聖書だけ読めば教会も信条も不要だ」という意味ではありません。教会の伝統や信仰告白は大切です。しかし、それらはすべて聖書に従うものであり、聖書に代わる権威ではありません。

ヘブライ人への手紙が示す啓示の完成

この考え方の背景には、ヘブライ人への手紙一章があります。

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

ここで注目したいのは、「御子によって語られた」という表現です。イエス・キリストは、数多くの預言者の一人ではありません。神の最終的な啓示として世に来られたお方です。ですから、キリストを超える新しい啓示はありません。使徒たちも、自分たちの言葉ではなく、キリストを証しする者として召されました。新約聖書は、その使徒的証言を教会に伝えています。その意味で、聖書はキリストについての十分で完全な証言なのです。

現代の教会への問いかけ

現代では、「神から新しいメッセージを受けた」という言葉を耳にすることがあります。神が私たちを導いてくださることを否定する必要はありません。祈りの中で励ましを受けることもあるでしょう。御言葉を読んで心が照らされる経験もあります。しかし、そのような経験は、必ず聖書によって吟味されなければなりません。改革派教会が慎重なのは、神が語られないからではありません。むしろ、神はすでに確かな御言葉を与えてくださったからこそ、私たちはその御言葉から離れてはならないと考えます。この姿勢は、私たちの信仰を狭めるものではありません。反対に、移り変わる人間の感情や時代の流行に左右されず、変わることのない神の真理の上に立つ自由を与えてくれます。

第一節のまとめ

こうして第一節は、大きな流れを描いています。まず、神は創造と摂理を通してご自身を現されました。しかし、人間は罪のゆえにその啓示を正しく受け止めることができませんでした。そこで神は、預言者たちによって語り、最後に御子イエス・キリストにおいて完全にご

自身を現されました。そして、その救いの啓示を教会がいつの時代にも正しく受け継ぐことができるように、御言葉を書き記させ、聖書として残してくださいました。だからこそ、今日の教会は聖書を開きます。それは単に古い宗教文書を学ぶためではありません。今もなお、その御言葉を通して語りかけてくださる主イエス・キリストの声に耳を傾けるためです。ウェストミンスター信仰告白は、その確信をもって、第一章の歩みを始めています。